

東北海道現代俳句協会会報

第15号

発行人 石川 青狼
編集人 鮎橋 郁香

令和五年一月二十日

『会員ならではの魅力を』



東北海道現代俳句協会 副会長 粥川 青猿

新しい年を迎えた。本来なら「明けましておめでとうございます」と申し上げるところでしょうが、素直に進めでどうの言葉が出てきません。暗いニュースが毎日続いています。

戦争や環境破壊、人権抑圧、日本でもコロナ禍は依然として終息が見通せず、加えて歴史的な物価高。その上に突然、防衛費倍増とかで増税。いつたいこの国はどこへ向かっているのでしょうか。

さて、東北海道現代俳句協会は一九九〇年に設立され、一時は百名を超える会員がいたのですが、現在は三分の一程度に減っています。全国の会員数も同じ傾向で、協会は準会員制の提起など、いくつかの検討を始めていますが、私は会員が増えない原因の一つが、会員になることのメリットがはつきりしていらないからだと思っています。

組織とか会員とか煩わしい人間関係を嫌う人たちが、インターネットやスマホで俳句を楽しんでいます。そんな状

況ではよほどの魅力を発信しなければ、会費を納めてまで入会する人は少ないと思います。

投句料なしとはいって、昨年の「おーいお茶新俳句大賞」には一九四万句を超える応募があり、テレビ番組のプレバトは高い視聴率を示しています。日本人の俳句への関心は決して低くありません。

ここでもう一度原点に帰つて、現代俳句の存在意義を確かめ、会員になることのメリットを生み出す工夫をしなければならないと思います。

● 新年度行事予定

◎第三十三回 東北海道現代俳句協会総会

(二月十六日・釧路)

◎現代俳句協会理事会・通常総会
(三月十八日・東京)

◎第三十二回 北海道現代俳句大会
(六月十一日・札幌)

◎第二十九回 東北海道現代俳句大会
(七月二日・帯広)

◆釧路ブロック恒例の墨書展を、プラザさいわいにて十月二十日～十一月十七日まで開催、会員の力作並んだ。またこの作品は、十一月二十六日～一月二十二日まで市立文学館で開催の「釧路俳句連盟創立六十周年記念企画展」でも展示される。

出品会員 十一名
作品数 十三点

- ・石川・小飼・斎藤
- ・清水・寺田・中島
- ・西村・村川・吉田
- ・吉野・鮒橋

(写真＝展示作品の前で)



◆八月一日(月)より一週間、帯広市役所市民ホールに於いて帯広原爆忌俳句展が開催された。俳句作品は募集せず、鈴木八駿郎さん所蔵の色紙や短冊三十点ほどをパネルに展示し、改めて核兵器廃絶を願った。

◆三年に一度の事業である第九回東北海道現代俳句協会賞の選考が十一月八日(火)に行われ、受賞者が決まった。今回は十篇の応募作品があつたが、残念ながら正賞該当作は三回続けて無く、準賞に吉野喜代子さんの「月天心」、また佳作賞に清水健志さんの「惑う星」が選ばれた。

(詳細は、別冊会報第五号(十二月発行)参照)。

なお授賞式は今年二月の総会席上にて行います。

・車座に死者も加わり野営の灯

吉野喜代子

◆今年の第三十三回伊藤園「おーい お茶」新俳句大賞の発表が十月にあり、吉野喜代子さんが佳作特別賞を受賞した。投句総数百九十五万句近い中から選ばれ、ペットボトルに作品が掲載されるという。おめでとうございます。

春は曙パン一斤の焼きあがる

吉野喜代子

また、もう一步の佳作賞には次の三人が入賞した。

翡翠のレーザービーム水の底
戴冠の如く新米よそいけり
西方の夏草無くば父の技

脇本千尋
菅原秋子
斎藤郁子

◆釧路俳句連盟創立六十周年の今年、市立中央図書館文学館にて記念企画展が一月二十二日(日)まで開催されている。その一環として十一月十一日(日)に東北海道現代俳句協会と共に「俳句ライブ」を実施した。リーディングサークル・ベガのお二人が俳句の朗読(合同句集「石笛」第十四集より、「釧路の四季を詠う」四十句)を行い、石川会長による俳句講座及び実作しての句会には、会員を含め二十名の市民(申込)が出席した。

◆第二十九回大とかち俳句賞全国俳句大会（九月）

十勝毎日新聞社賞・

鈴木八駿郎・石川青狼特選

旗一本立ておしまい馬頭祭

粥川 青猿

優秀賞・都賀由美子・安田豆作特選

氷点下二十一度の新聞紙

よしざね弓

同・石川青狼・十河宣洋特選

遠雷やハンカチ落としみたいだな

村川三津子

佳作・荒船青嶺・石川青狼特選

開墾の血氣もゆ色草ばん馬

江波戸 明

石川青狼特選

鳥帰る視力検査の輪の切れ目

粥川 青猿

鈴木八駿郎特選

片意地の無くてどうする蛇苺

脇本 文子

（会員作品は後記）

大沼恵美子

◆第五十九回現代俳句全国大会（十一月・福岡）において

新得町の中島土方さんが「俳句のまちあらかわ賞」を受賞されました。また土方さんは帯広市民文芸賞、「樺の芽」競詠賞を受賞されており、連続の快挙となりました。

心よりのお祝いと益々のご活躍をお祈り申しあげます。
俳句のまちあらかわ賞

失言の多くは本音蟬しぐれ

帯広市民文芸賞（20句より抄出）

皺の手も農具のひとつ耕しぬ

「樺の芽」競詠賞（「卒寿」15句より）
九十の次は百歳夕木槿



早川千鶴子

（課題句）（課題：「白鳥」）
帯広市教育委員会教育長賞・
佐藤宣子・竹内直治・山陰進特選
ふるさとは白鳥が来て父が居て 松原 静子
日本伝統俳句協会北海道支部賞・
瀬戸優理子・都賀由美子・辻脇系一特選
白鳥帰る空のどこかで鍵の音 粥川 青猿
星野高士特選
群青を展げる水面白鳥来 吉野喜代子
中原道夫特選
白鳥の翔ぶに重たき声のあり 清水 健志
竹内直治特選
白鳥を呼び込んである町おこし 大沼恵美子

中屋吟月特選

白鳥の首しなやかに湖満たす 中島 土方
白鳥を呼び込んである町おこし 大沼恵美子

（雜詠句）

帯広市教育委員会教育長賞・
荒船青嶺・鈴木八駿郎・竹内直治特選
手の皺も貌も履歴書そばの花 粥川 青猿

東北海道現代俳句協会賞・

佐藤宣子・橋本喜夫特選
跨がれているとも知らず大昼寝

第二十回とかち俳句賞

全国俳句大会 一 会員作品抄一

(九月二十四日・帯広)

《課題句「白鳥」》

白鳥の蹟いている国さかい

白鳥やそれでも帰る道を行く

白鳥の一陣迎ふ湖の晴

白鳥の群れもはや四次元に映ゆ

白鳥のモノローウォーク屈斜路湖

帰る日を決めかねてゐる白鳥よ

五千羽の白鳥湖を我が物に

白鳥来湖の青さの整へり

白鳥帰えるわたし鉢で馬と待つ

泥んこの二羽の白鳥帰りなさい

江波戸 明

脇本 千尋

飯沼 風華

横地 妙子

早川千鶴子

荒川 美恵

寺田 保子

鈴木八駿郎

石川 青狼

《入賞》

・二位、佐藤一労幹事長 特選

枯葉舞う言えずじまいの多きこと

村川三津子

初秋刀魚筆庄強き宛名かな

小飼 紫香

・伊東礼子相談役 特選

背凭れをはなれ白露のピアニスト

横地 妙子

・石川青狼会長 特選

物音にドアを開ければ満月

・山田美智子副会長 特選句

良きことをポケットに入れ大花野

小飼 紫香

この庭が終の住処か秋の蜂

まつさらな秋夕焼よ貰う座五

世相は世相とに角うまし今年米

身ほどりの花を供ふる月の窓

すこやかな押し問答や秋桜

神の気配大湿原の大夕焼

秋蛍夢の下流に棲んでいる

葉鷄頭素数みみたいに立つてゐる

雪蛍ひとつは今日の記念です

秋夕焼あんこ煮つめゐる母性

朔北の母子像の反り雁の空

第七十四回 鋼路市芸術祭 兼 鋼路俳句連盟六十周年記念俳句大会

(十月二十三日・鋤路)

《課題句「白鳥」》

白鳥の蹟いている国さかい

白鳥やそれでも帰る道を行く

白鳥の一陣迎ふ湖の晴

白鳥の群れもはや四次元に映ゆ

白鳥のモノローウォーク屈斜路湖

帰る日を決めかねてゐる白鳥よ

五千羽の白鳥湖を我が物に

白鳥来湖の青さの整へり

白鳥帰えるわたし鉢で馬と待つ

泥んこの二羽の白鳥帰りなさい

江波戸 明

脇本 千尋

飯沼 風華

横地 妙子

早川千鶴子

荒川 美恵

寺田 保子

鈴木八駿郎

石川 青狼

《入賞》

・二位、佐藤一労幹事長 特選

枯葉舞う言えずじまいの多きこと

村川三津子

初秋刀魚筆庄強き宛名かな

小飼 紫香

・伊東礼子相談役 特選

背凭れをはなれ白露のピアニスト

横地 妙子

・石川青狼会長 特選

物音にドアを開ければ満月

・山田美智子副会長 特選句

良きことをポケットに入れ大花野

小飼 紫香

この庭が終の住処か秋の蜂

まつさらな秋夕焼よ貰う座五

世相は世相とに角うまし今年米

身ほどりの花を供ふる月の窓

すこやかな押し問答や秋桜

神の気配大湿原の大夕焼

秋蛍夢の下流に棲んでいる

葉鷄頭素数みみたいに立つてゐる

雪蛍ひとつは今日の記念です

秋夕焼あんこ煮つめゐる母性

朔北の母子像の反り雁の空

字余りのやうな余生や花筏	中島 土方
すかんぼや少年の髭うすうすと	松原 静子
忘却とは秋刀魚の匂い夕間暮れ	飯沼 風華
不確かな明日を手帳に蝶生るる	大沼恵美子
炎天やひときわ光る水しぶき	金野 克典
髪切ればひとに逢ひたし初螢	鶴橋 郁香
倍音の森の匂いや水馬	清水 健志
夏空を少し覆えば秘密基地	中島 加奈
田圃無き地のじやがの花ジャガの花	寺田 保子
とりかぶと女に齡を聞かれけり	鈴木八駿郎

葉鷄頭素数みみたいに立つてゐる	小飼 紫香
すこやかな押し問答や秋桜	吉野喜代子
神の気配大湿原の大夕焼	山田美智子
秋蛍夢の下流に棲んでいる	早川千鶴子
葉鷄頭素数みみたいに立つてゐる	寺田 保子
すこやかな押し問答や秋桜	中島 加奈
神の気配大湿原の大夕焼	西村 牛歩
秋蛍夢の下流に棲んでいる	斎藤 奈津
葉鷄頭素数みみたいに立つてゐる	鶴橋 郁香
すこやかな押し問答や秋桜	吉田 洋子
神の気配大湿原の大夕焼	石川 青狼

二 現代俳句協会の社団法人化について =

※ 現在、現代俳句協会は任意団体として活動をしていますが、新しく「一般社団法人」として登録することになりました。その主な理由として

①資産（預金、知的財産等）の保全、②重要諸契約の円滑な運用（賃貸借契約、事業実施契約）、③社会的信用の担保（俳壇内外からの信用力の向上）、④活動の活性化（新たな事業への進出と財政基盤の安定化）が挙げられます。

※ ただし法人化するのは現在の本部機構のみで、42ある地区協会は現状の任意団体のままで継続されます。ですから我々の地区協会の活動そのものは今までと変わりません。

※ 「現代俳句」誌12月号の43頁に組織図と本部 後藤幹事長よりの説明が掲載されています。

* * 令和四年 わたしの一句 *

この一年、俳誌や句会に出した句、出さない句、
会員・準会員の渾身の一句をお楽しみください。

(順不同)

《春》

白鳥帰る空のどこかで鍵の音
春の闇産科病棟から乳ぜり泣き
陽炎や子の800走浮かびおり
廃屋や蝶の重さに耐へかねて
合掌のかたちに軍手売る三月
ひらがなの図鑑を送るつくしんぼ
真打ちです大器晩成鉄路八重
もう少し桜でいたいさくらかな
ミモザの日カンパニーニュを厚く切る
石鹼玉過去も未来もみな丸く

粥川	青猿
西村	奈津
中尾	克彦
鮎橋	郁香
菅原	釧子
佐藤かよ子	
北原	白道
飯沼	風華
芳賀	知子
中村きみどり	

《夏》

ただ眠る太平洋に夏の雨
青嵐十七才の後ろ向き
初バイト三百本のバナナ剥く
道草や同じ匂いのする人と
大安吉日薔薇は楷書で書く

山陰	進
松原	静子
よしざね弓	
村川三津子	
斉藤	郁子

《冬・新年》

地吹雪を抜けず仏者に道を問う
あちこちが痛くて元氣木の葉髪
聖葉切る正中線のあやふや
羽衣のあるりと揺らす寒の水
凍てのこる伝言めきし靴の跡
初明りカーテン開けるにかしこみて

江波戸	明
村	牛歩
中島	加奈
脇本	千尋
吉野喜代子	
寺田	保子

濃厚な夏閉じこめて草ロール
ニタイ・トを揺るがす北の蟬の声

荒川 美恵
中島 土方
早川千鶴子
山田美智子

横地 妙子
蝦夷梅雨や旅の終りは火を欲りぬ
うぶすなは美瑛丘とて夏帽子
跨がれているとも知らず大昼寝

小飼	紫香
荒川	美恵
中島	土方
早川千鶴子	
山田美智子	

《秋》

部屋中に満つる桃の香離乳食
新涼や万里を拭う甘露かな
月なんぞ行つてどうする槍持つて
一位の実たわわ童の爺が庭
胡桃焼く山影をわが眉を濃くし
コスモスに強か打たれたる木偶よ

吉田	洋子
金野	克典
那珂剣坊子	
清水	健志
山本	勲
石川	青猿

令和四年 月例句会作品抄

(釧路ブロック)

*** 次の文章を読んで、この月の句を書く

七月

蝦夷梅雨や一日渾沌さ迷へる	荒川 美恵
樹陰受く骨箱白く白く夏	飯沼 風華
冷蔵庫あければ惚ける振りだしへ	北原 白道
万緑の中ボレロ舞う恍惚	小飼 紫香
わが厨いすれ無人家燕の子	斎藤 郁子
手鏡を新しくする半夏生	佐藤かよ子
柳絮とぶクレオパトラは絨緞に	清水 健志
夏服の心ひらいて洗いけり	菅原 穂子
緑雨なるどの窓とてもオアシスに	寺田 保子
陽炎や子の800走浮かしおり	中尾 克彦
なぞなぞの溢れる子からかき氷	中島 加奈
切り株の切り口新し青胡桃	中村きみどり
弾かれる預金通帳溽暑かな	西村 奈津
牡丹散つて四十二片の嵩高さ	芳賀 知子
地球訝しと危ぶむ青葉木菟	早川千鶴子
草むしり姫は「異国の丘」に居り	鮎橋 郁香
ウクライナ向日葵の種をポケットに	村 牛歩
半額のバナナも旨しハンモック	村川三津子
やち坊主海霧の底ひにたむろして	横地 妙子
アイスティ女無天の呼気は接吻に似て	よしさね弓
夕凪や花は十字のクレマチス	吉田 洋子
夏蝶舞い庭に浮力のゆきわたる	吉野喜代子
その決断それでいいのか水やうかん	脇本 文子
噴水やぱたたんと跳ねそれつきり	脇本 千尋
メロン五個夏が本気を出している	石川 青狼

八月

黒揚羽つと抱擁す沙羅の花	荒川 美恵
八月や心の穴の蓋がない	飯沼 風華
八月の御巣鷹山にちぎれ雲	北原 白道
拭き上げて踏む躰に秋隣	小飼 紫香
グラジオラス束にするには個性的	斎藤 郁子
面会もできぬまま逝く古扇	佐藤かよ子
夏空の耳をひっぱる山鳴らし	清水 健志
西瓜切る日本時間はおよそ昼	菅原 穂子
逃がすまじ師の蔵書もて蠅たたく	寺田 保子
ふらここや脚空に向け鹿を蹴る	中尾 克彦
湿原の笑う観察史上最高温度	中島 加奈
綻画がいつも曲がりて日傘の柄	中村きみどり
コーヒーの尖つた甘み八月来	西村 奈津
後ろ手の未来といふ絵晩夏光	芳賀 知子
星涼し如意椿耳の穴さぐる	早川千鶴子
昌美の忌暑し受信なきファックス	鮎橋 郁香
冬瓜來冬瓜の日々始まり	村 牛歩
鍋底の焦げ取り残し八月尽	中村きみどり
綺麗つぽい舌打ちひとつちろりん	西村 奈津
じやあまたねコスマスの角で振り返る	芳賀 知子
コロナの目掠めて祭街爛る	早川千鶴子
幾つもの地震の思ひ出虫すだく	鮎橋 郁香
商店街ムラサキハンドイの花匂う	村 牛歩
「アンダンテ」生き生きと描く初秋かな	村川三津子
ベン皿に置く補聴器や夜のちちら	横地 妙子
雨のあぢさゐ約束は今日のはず	よしさね弓
うたた寝のカウチにあふるる秋日差	吉田 洋子
お囃りのるつぼ背高泡立草	吉野喜代子
はつとしてちょつと駆け足石叩き	脇本 文子
羽を伸ばし九月の写真撮りましよう	石川 青狼

九月

秋真昼どこへ未來を黒毛虫	荒川 美恵
釧路港の生臭薄れいわし雲	飯沼 風華
サングラス掛けで話せば嘘くさい	北原 白道
空っぽの言い訳ばかり鬼灯よ	小飼 紫香
鱗おろす我を值踏みすその眼	斎藤 郁子
一人眺める丹精こめた花畠	佐藤かよ子
秋澄むやデクレッションドのなまんだぶ	清水 健志
秋の夜の置けばそっぽを向く薺籠	菅原 穂子
屯田兵の裔に還りて墓詣	寺田 保子
ふるさとの味薄れゆく蕎麦の花	中尾 克彦
冬瓜來冬瓜の日々始まり	中島 加奈
屯田兵の裔に還りて墓詣	寺田 保子
ふるさとの味薄れゆく蕎麦の花	中尾 克彦
冬瓜來冬瓜の日々始まり	中島 加奈
鍋底の焦げ取り残し八月尽	中村きみどり
綺麗つぽい舌打ちひとつちろりん	西村 奈津
じやあまたねコスマスの角で振り返る	芳賀 知子
コロナの目掠めて祭街爛る	早川千鶴子
幾つもの地震の思ひ出虫すだく	鮎橋 郁香
商店街ムラサキハンドイの花匂う	村 牛歩
「アンダンテ」生き生きと描く初秋かな	村川三津子
ベン皿に置く補聴器や夜のちちら	横地 妙子
雨のあぢさゐ約束は今日のはず	よしさね弓
うたた寝のカウチにあふるる秋日差	吉田 洋子
お囃りのるつぼ背高泡立草	吉野喜代子
はつとしてちょつと駆け足石叩き	脇本 文子
羽を伸ばし九月の写真撮りましよう	石川 青狼

十月

水打ちたるやうな紅葉靈園に
生き死には別問題よ鮭風
生かされて生きる重さや曼珠沙華
片耳の勾玉ピアス秋氣澄む
壁這つて明日死ぬだらうあぶれ蚊
弟を見る目が母の七五三
国葬が玄関に来る暮の秋
凭れ合うカルテとカルテ冬隣
混雑を離れ迂回の良夜かな
ミナミニクシ鬼灯ナラスクチビル
週末はいつも台風令和初期
信楽の花瓶の重さ秋湿り
庭に八千草ザツソウという草はなく
秋微雨こていかんねんすすごうか
十月の歩幅に合はぬ螺旋かな
夕月や今宵も数多の星連れて
麦粉こねる虫が好かないひと
秋晴るる女相撲の勝ち名のり
アキアカネ風に遊ぶという歟世
もう会へぬうからや赤とんぼ
けふのこととほきおもひで名の木散る
煙突にチヨークで印鳥渡る

荒川	美恵	荒川	美恵
飯沼	風華	飯沼	風華
北原	白道	北原	白道
小飼	紫香	小飼	紫香
齊藤	郁子	齊藤	郁子
佐藤	かよ子	佐藤	かよ子
清水	健志	清水	健志
菅原	糸子	菅原	糸子
寺田	保子	寺田	保子
中尾	克彦	中尾	克彦
中島	加奈	中島	加奈
中村	きみどり	中村	きみどり
西村	奈津	西村	奈津
芳賀	知子	芳賀	知子
早川	千鶴子	早川	千鶴子
鮎橋	郁香	鮎橋	郁香
村	牛歩	村	牛歩
村川	三津子	村川	三津子
横地	妙子	横地	妙子
吉野	喜代子	吉野	喜代子
石川	青狼	石川	青狼

十一月

園児らのひとり一鉢菊まつり
現世へと長薯引いて法悦
それぞれの枯野踏みしむ音白し
千大根並ぶベランダからショパン
秋夜の遷御ハッピーバースデイのピザ
冬初め時計を五分進ませる
日時計の影となりたる寒鴉
冬ぬくしふかふか刻む油揚げ
産土の山の呼ぶ声蛙跳ねる
國境の秋刀魚祭りに巡視船
助走には脆き十一月の空
一つベンチに五人の子供しまえながら
雪虫や惡意の量が降つてゐる
竹の春夭折の画家企画展
行きあたりばつたりイズム着ぶくれて
転調の三番はソロ冬はじめ
難聴を悪友と呼び桐一葉
吹きますね我胸奥か風か
主語略し真つすぐに入る鬼やんま
少年の吐息の輕雪螢
「またあした」繰返すたび冬ざるる
鮭嵐廻駅跡の転車台
露天なる湯気の向こうも十二月
真つ新なノート一冊年用意
何もかも枯れし身ほとり爪を切る
大根切るひとひらごとの水の音
冬雀あの子おとなになつたらうか
冬鳥や丸く納めた腹の内
着ぶくれて頑固者では過ごせぬ世

荒川	美恵	荒川	美恵
飯沼	風華	飯沼	風華
北原	白道	北原	白道
小飼	紫香	小飼	紫香
齊藤	郁子	齊藤	郁子
佐藤	かよ子	佐藤	かよ子
清水	健志	清水	健志
菅原	糸子	菅原	糸子
寺田	保子	寺田	保子
中尾	克彦	中尾	克彦
中島	加奈	中島	加奈
中村	きみどり	中村	きみどり
西村	奈津	西村	奈津
芳賀	知子	芳賀	知子
早川	千鶴子	早川	千鶴子
鮎橋	郁香	鮎橋	郁香
村	牛歩	村	牛歩
村川	三津子	村川	三津子
横地	妙子	横地	妙子
吉野	喜代子	吉野	喜代子
石川	青狼	石川	青狼

十二月

霜月命日蝦夷菊確と咲き
名残の空世間の騒き賣いに行く
大晦日父の忌日や不文律
小さき足クジラは進化して泳ぐ
新米や感情線を握り込む
小春日和息整えて太極拳
白鷺の首におちつく初雪よ
地獄図の前のだらりと抱くコート
多面体のきみのブルーに帽明り
散步道白鳥一羽先をゆく
十二月八日中敷きの振れゆく
雪眼鏡この足跡は僕の船
鯛焼きの油断しきつた背びれかな
年の暮ひとつ仕舞いてひとつ出る
最扇最扇の手拭の波大相撲
「またあした」繰返すたび冬ざるる
鮭嵐廻駅跡の転車台
露天なる湯気の向こうも十二月
真つ新なノート一冊年用意
何もかも枯れし身ほとり爪を切る
大根切るひとひらごとの水の音
冬雀あの子おとなになつたらうか
冬鳥や丸く納めた腹の内
着ぶくれて頑固者では過ごせぬ世

「現代俳句」列島春秋

(地区別現代俳句歳時記)

入会・なし

退会・佐藤蒼林(池田)、宮坪勝美(遠軽)

吉田どんぐり(北見)、笛原瑞子(幕別)

大沼恵美子(厚岸)

転出・中村きみどり(札幌へ)

一月	蓮葉氷のスクラムを組む日の出	石川 青狼
二月	凍星の貝塚あるらし熊牛原野	中島 加奈
三月	体幹の危うき朝や流水来	西村 奈津
四月	掛け声のかすれ明るき毛蟹漁	よしざね弓
五月	千島桜よ友好の日々色濃くす	吉田 洋子
六月	泥炭に海霧の潜みて幾星霜	清水 健志
七月	螢舞う釧路湿原のまどろみ	斎藤 郁子
八月	咲くやもうホザキシモツケしどけなし	芳賀 知子
九月	欠点も逝けば満点蕎麦の花	佐藤かよ子
十月	秋刀魚消え係留の船黙秘	北原 白道
十一月	雪虫に囮まれて白昼夢	松原 静子
十二月	丹頂の純白よぎる我が頭上	寺田 保子

編集後記

▼ 明けましておめでとうございます。

会報十五号をお届け致します。

▼ 新年度の第三十三回総会は二月に釧路開催予定です。そのお知らせを同封しましたので、出欠の葉書を忘れずご回報ください。

▼ 昨年は北京冬季五輪後、ロシアのウクライナ侵攻が始まり未だ先が見えません。他にも異常気象による災害や重要な政策の大転換などが多く、緊張の絶えない年でした。

▼ 社会的には行動の制約が解かれ、俳句界も各種会合がもたれるようになりました。今年は吟行会も再開できると良いですね。

▼ 活発な動きの中でこそ冷静な「専守防衛」を。
ご自愛くださいませ。

(郁)

計報

村 牛歩さん(86歳) 本年一月七日、急性心不全により逝去されました。心よりご冥福をお祈り致します。



◆会員動向

十二月末現在の会員数 [三十三名]

入会・なし

退会・佐藤蒼林(池田)、宮坪勝美(遠軽)

吉田どんぐり(北見)、笛原瑞子(幕別)

大沼恵美子(厚岸)

転出・中村きみどり(札幌へ)